

冬の特選資料展

奥会津の職人巻物

福島県立博物館

夫倉吉月之鍼云者目前下血筋也此脉
 鍼刺二分血生五合餘諸之熱頭登涙流目
 昏出上一切之眼疾用針也所者馬刺存
 ○命道之針云者上唇ツルツルノ脉針刺事二分血
 出ハント分鍼之邪表刺テ血也口傳有煩時茶碗

○上六脉之事 ○前面六門

秘鍼卷

依承
 東洋奇生
 秘鍼卷
 一



冬の特選資料展

奥会津の職人巻物

会期 1月20日(土)～2月25日(日)

奥会津と呼ばれる地域は、福島県南会津郡と大沼郡の一部の山間地方に位置し、近世には「南山御蔵入領」と呼ばれる天領の地でした。この地方は、尾瀬を源とする只見川が流れ、ブナ林など落葉広葉樹におおわれ、「丈余りの雪」と呼ばれる三メートル以上に及ぶ豪雪地帯です。

その一地域の只見町は、南会津郡西部地域に位置し、七四七平方キロメートルという広大な面積を有し、その九〇パーセント余りがブナ林などの森林が占めています。只見町は、一月末から四月初旬までは雪におおわれ、屋外での仕事にも大きな支障があります。この地方の人たちは、冬期間に栃木、茨城、埼玉、山梨などの北関東地方へ屋根葺の出稼ぎに出ました。これを関東稼ぎなどと呼んでいます。

只見町周辺の屋根葺職人たちは、一人前になると、師匠より巻物を伝授され、これを大切に所持し、弟子の育成をしながら、この地方の屋根葺の技術を伝えてきました。

只見町をはじめとする奥会津地方には、このような職人たちが所持する巻物がさまざまな職種の中にもみられ、今でもその巻物の民俗がこの地方の職人たちの生活に生き続けています。この特選資料展では、只見町を中心とした奥会津地方の職人巻物を通じて、職人たちの生活と民俗について紹介します。

主な展示資料を中心に、その内容を紹介します。



元山(伐採)の巻物 只見町
巻物をひろげ祝詞をあげ、山の神に感謝する

まず、最初に只見町を中心とした奥会津地方の自然と生業について写真パネル等で解説します。奥会津の豪雪・ブナ林。只見川等の川と人々の生活についても解説します。

檜枝岐村・只見町などでは、山で働く人をヤモウド(山人)と呼んでいます。また、木材を伐採する人をモトヤマ(元山)と呼び、屋根の伐採・加工を営みとする人が、村に数人いました。モトヤマもその職祖や祭祀に関する巻物を所持し、伐採後の祭りには巻物をひろげ祈禱し、山の神に感謝するとともに、木の再生を祈りました。

只見町には、山の神を祀る家柄にヤマサキ(山先)と呼ばれる人々があります。ヤマサキは山の神の由来や狩猟神の由緒を書いた巻物を所持し、シシヤマと呼ばれる共同狩猟において、頭領を勤めていました。奥会津地方には、その他、番匠(大工)や船大工・石工・杜氏・庭師などさまざまな職種の巻物があります。

また、祝言や葬式をはじめ、礼儀作法を記した小笠原流の巻物や冊子、商人の由緒を記した「連積大事」と呼ばれるものなど、技術のみならず礼儀作法や商人など、さまざまな職業にわたるものがあり、中世(鎌倉・室町時代)のころの職人の世界を思わせるような民俗が垣間見られます。

この特選資料展「奥会津の職人巻物」は、神奈川大学日本常民文化研究所の職人巻物の調査に関連し、開催するものです。

奥会津の職人巻物の世界から奥会津の職人氣質にふれてみませんか。
(民俗担当 佐々木長生)



- (上) 番匠(大工)の巻物 只見町
上棟式に棟梁が巻物をひろげ祝詞をあげる
- (下) 屋根葺の巻物 只見町
グシ祭りに、棟梁が巻物をひろげ、祝詞をあげる



関連行事

○民俗講座

「会津の職人巻物の民俗的世界」

講師 当館学芸員 佐々木長生

日時 一月二十八日(日)午後一時半

会場 視聴覚室

■冬の特選資料展(奥会津の職人巻物)は、平成一九年一月二〇日(土)から二月二五日(日)まで開催しています。
■観覧料 常設展観覧料でご覧いただけます。一般・大学生二六〇円(二二〇円) / 高校生・小・中学生無料()は二〇名以上の団体の場合の料金です。

秋の企画展

「徳川将軍家と会津松平家

— 葵の絆 —

関連事業

◎記念講演会

平成一八年一〇月一日（日）

「天下泰平の終焉 悲劇の会津松平家と徳川家」

講師（財）徳川記念財団理事長

徳川恒孝さん

二六〇年続く泰平の世の中で、たとえば日本橋のぎわいに代表されるような大都市江戸の繁栄があり、リサイクルを徹底させた洗練された経済生活、世界に誇る識字率の高さや武士の道徳などが育つてゆきます。そのような平和のしくみが築かれるうえで、会津松平家初代の保科正之が大きな役割を果たしました。幕政の中心にあって、明暦の大火後の江戸城天守閣の再建をやめて町づくりを進めたことや、江戸の町を潤す玉川上水開削の事業に取り組んだことがあげられます。会津松平家は、その後も江戸幕府・徳川将軍家を支え続け、激動の幕末にあって、それは変わりませんでした。とくに幕末には困難な政局に立ち向かった將軍や藩主が、いまだ若かったことには心を打たれるものがあります。

■企画展オープンの翌日に開催された講演会には、多くの方々が集まり、会場は満席になりました。講演の途中では、ユーモアたっぷりの例え話が随所に飛び出し、一時間半の時間は、あっという間に過ぎてゆきました。



◎記念講演会

平成一八年一〇月八日（日）

「戊辰戦争前後の会津」

講師 中央大学教授

松尾正人さん

王政復古のクーデターの後、鳥羽・伏見の戦いに端を発する戊辰戦争が始まり、その渦中に会津藩も飲み込まれてゆきます。その間、幕府や朝廷との関わりで、会津藩主松平容保がどのような立場にあったかは、今回の企画展で展示されている長文の「会津藩士嘆願書」に連綿とつづられています。また戦後の若松周辺のようなすを知りうる史料として、岩代国



巡察使とともに会津を訪れた旧館林藩士岡谷繁実の日記は貴重です。城下の被害のようすや会津地方の荒廃ぶりは、新政府側の役人をも驚かせる程であったことがわかります。岡谷は、混乱した若松の安定化に尽力し、さらには幼い松平容大を継嗣として陸奥斗南の地で会津松平家を再興させる動きにも深く関与していました。

（歴史担当 高橋 充）

Q..自宅の蔵から、塗りのお椀がたくさんみつかりました。松と箒の模様が描かれていたのですが、何か意味があるのでしょうか？

A..松と箒の組み合わせには重要な意味があります。松はある人物の本性。箒はその人物の持ち物。松と箒は、箒で松の周囲を掃き清める松の精・「高砂」の翁と姥の暗示です。

婚礼で「高砂や、この浦船に帆をあげて…」とその一節が語られることで有名な能の演目「高砂」は、「相生松」とも呼ばれる祝賀性の高い物語です。簡単にあらすじをご紹介します。

主役の不在

— 留守模様 —

九州阿蘇の神主が、京都へ都見物に訪れる途上、和歌に詠まれた名所・播州の高砂（現在の兵庫県）に立ち寄りました。そこに老夫婦がおり、翁は熊手を、姥は箒を手に松の落葉を掃き集めています。翁はその松こそが名高い高砂の松だと神主に教え、高砂の松と住吉（現在の大阪府）の松は相生の松、共に生きる夫婦の松だと告げます。翁は松の長寿と長年連れそう夫婦の絆を寿ぎ、松の栄えは天下泰平の表れであると帝の治世を讃えました。実は、翁は住吉の松の精、姥は高砂の松の精で、二人こそが遠く離れても長年連れ添った相生の松そのものだったのです。

お持ちのお椀には、翁と姥の姿は描かれていないようですが、松と箒が組み合わされていることよって、この「高砂」に取材したデザインであることがわかります。

このように画題の主役の人物を描かずに、持ち物や背景などで暗示する手法を「留守模様」と言い、工芸品のデザインによく見られます。器物や背景だけで場面を表現することは、見る人に文学的な謎かけをするような遊び心が感じられます。

当館にも、「高砂」を留守模様とした工芸品がいくつかあります。そのひとつは幕末の会津藩主・松平容保が使っていた煙草盆です。裏を見ると、そこに

Q&A

回答者

美術担当

小林めぐみ

は松の大樹が伸び、根元には箒と熊手が倒れています。ここでも箒と熊手の持ち主の姿は見えませんが、松と箒と熊手の組み合わせから、「高砂」をモチーフとしていることがわかります。

では表はどうでしょうか。中央に橋がありその周囲に牡丹が咲き乱れているだけで、表も主役は留守のようです。こちらの主役は獅子。橋と牡丹の組み合わせは、やはり能の演目である「石橋」の暗示です。文殊菩薩が住む清涼山にかかる橋に、文殊菩薩の霊獣・獅子が現れ、山一面に咲く牡丹に戯れながら舞うという「石橋」をモチーフとしています。



紫檀能尽蒔絵煙草盆（裏） 福島県立博物館蔵

紫檀能尽蒔絵煙草盆（表）



恵日寺旧蔵の撥鏤尺

木田浩 歴史担当

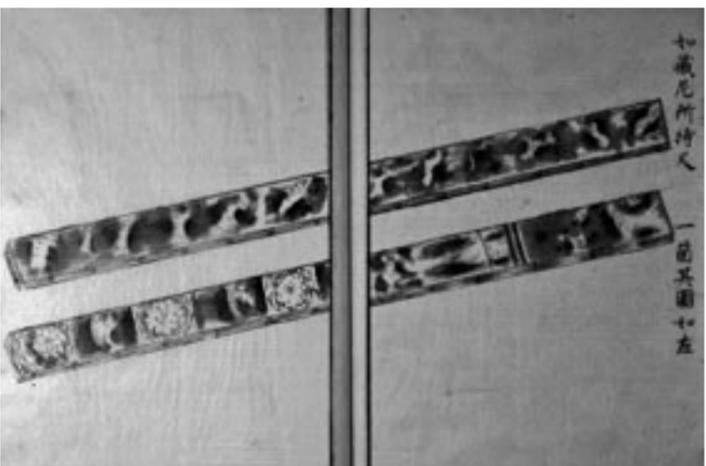
磐梯町で復元が進んでいる恵日寺金堂は、平安時代初期に奈良興福寺や東大寺で学んだ法相宗僧徳一が創建した寺院の中心のお堂です。このお寺が後の会津の仏教文化に与えた影響は大きいと考えられています。ほとんど当時の資料が残されていません。

ところが昨年九州国立博物館の特別展「美の国日本」で、明治のはじめ以降消息がつかめなかった恵日寺の撥鏤尺が出品されました。

撥鏤尺とは「象牙を染め、表面を浅く彫って文様を白く彫り表す撥鏤技法で装飾された華麗なもの」として、中国唐の時代に「儀礼用に誂えたもの」だとされています（奈良国立博物館『第五十八回正倉院展目録』二〇〇六年）。そしてそれが聖武天皇（七〇一〜七五六）の遺品などを納めた正倉院に伝わっているのです。

したがって恵日寺の撥鏤尺が、正倉院に納められる資料と同時代、同種のものであるとすれば、奈良時代中期から平安時代初期、創建当初の徳一や恵日寺の立場などを考える上で大変参考になります。そこで今回は「第五十八回正倉院展」に出品された撥鏤尺を観察して気付いた点を報告したいと思います。

第一に保存状態の良さです。展示ケース越しですがほとんど傷らしきものが見当たらず、彩色がスポットライトの光を受け輝いていました。一〇区画に分けられたオモテ面には唐花をひとつおき、その間に鳳凰・サンジャク・花角鹿・鳥・鴨が彫り出され



【如蔵尼所持尺】として描かれた恵日寺の撥鏤尺（『新編会津風土記』巻之五十三より） 会津若松市立会津図書館蔵

ています。ウラ面は区切られることなく九つのモチーフ（サンジャク、草花、ヤツガシラ、草花、蓮華に立つ鴨、草花、花角鹿、草花、オシドリ）がバランス良く配られています。また側面にはほぼ均等に小文様が並べられています。表面がやや光沢を失い、上下端の角の部分に象牙の地が露出している箇所や、側面に染料の固まりが黒ずんで見られる部分もありましたが、これらは使用時の破損や汚れとは考えられず、反対にあまり使用されず製作後、手を加えられていないことを表していると思われる点です。

第二に撥鏤技法の効果が大きいにかざれている点です。紅色からアイボリー（地の色）へ変化する中

間の色や削り残しが、柔らかくふくらむ花卉、丸みを持った動物の腹部などの立体感を伝えることに成功しています。さらに小鳥の羽、蝶、草花の茎や葉など細部の彫りに破綻するようなところが見られません。一方、花卉の一枚一枚や二羽の鳥の構成などに均整が保たれており、全体としてのバランスに優れ、定規としての性格を損なわない効果をもたらしています。

以上の点から私は今回出品された正倉院所蔵の紅牙撥鏤尺は日本の風土には実用・儀式用ともに定着せず宝物として伝来してきたものの印象を受けました。一見してものさしであることが分かる資料ですが、使うことを目的としない道具が、なぜ恵日寺に残されたのでしょうか。

日本での撥鏤尺は現在正倉院以外にも確認されるものとして三点、未確認資料数点があると指摘されています（由水常雄『天皇のものさし』麗澤大学出版会、二〇〇六年）。このように数少ない貴重な資料が、なぜ法隆寺や東大寺という大寺院ばかりか恵日寺にも残されていたのでしょうか。報告によれば恵日寺旧蔵資料の寸法や外形などは今回調査の尺と異なっています。尺度は時代によって異なりますので、これらのものさしがいつの時代のものなのかという視点も含めて比較検討していかねばならない多くの点が残されています。今後は創建当初の恵日寺を考察する上で、同寺旧蔵資料を含め各地に伝わる撥鏤尺を一点一点調査することが必要であると考える

註(1) 法量：長29・6 幅2・6 厚0・7（九州国立博物館『美の国日本』二〇〇五年五七頁参照）
註(2) 法量：長30・2 幅2・8 厚1・0（奈良国立博物館前掲書二〇〇三二頁参照）

トピックス

博物館の「顔」 展示解説員

博物館のあちこちに「展示解説員」がいるのをご存知でしょうか。現在女性二〇名、男性二名が活動しています。とかく難しくなりがちな専門的な知識を、わかりやすく伝える。この難しい役目を展示解説員が果たしているのです。まさしく博物館の「顔」といえます。今回は、その毎日の仕事をご紹介します。

なかでも一番の仕事は展示室での解説です。交代で展示室に立ち、資料について説明をしたり、質問に答えたりしています。また、土・日曜日には「やさしい」こと、やさしい展示解説会を実施しています。常設展示室を三〇分程でご案内するのですが、実はマニュアルがありません。その日の担当者によって異なる二種類の解説になり、何度聞いても新しい発見があることまぢがいありません。

博物館の知られざる人気スポット、体験学習室も活動の場の一つです。いろいろな昔のおもちゃや衣装で遊んだり、身につけたり、展示解説員はそのお手伝いをしていきます。

そして、おもちゃや季節の行事などを題材に、様々な工作が楽しめる「おもちゃをつくろう」や「はくぶつかんで遊ぼう」も実施しています。来年も「鬼の面をつくろう」(二月三日)、「第三回おもちゃをつくろう」(三月十日)を予定しています。子供時代を思い出し、子供たちと一緒に作ってみてはいかがでしょう。

みなさんも博物館にいらしたら、展示解説員にお気軽に声を掛け下さい。解説員一同、ご来館を心よりお待ちしております。

(展示解説員 平野久美子)



「やさしい展示解説会」



「はくぶつかんで遊ぼう！七ツかざりをつくろう」

「やさしい展示解説会」

毎週土・日曜日 午前十一時、午後二時開始
※他の行事と重なる場合は開催しません。

「はくぶつかんで遊ぼう！ 鬼の面をつくろう」

二月三日 午前九時三〇分〜午後四時三〇分
時間内随時受け付け、参加費無料・予約不要

「第三回おもちゃをつくろう」

三月一〇日 午後一時三〇分〜三時三〇分
参加費無料・要予約（一ヶ月前から）

まほろん移動展

新編陸奥国風土記巻之五 会津郡・耶麻郡その一

福島県文化財センター白河館『まほろん』は福島県教育委員会が発掘調査を行った遺跡の出土品を数多く保管し、毎年「新編陸奥国風土記」と題して古代の郡を単位とした調査成果展を実施しています。一八年春にはシリーズ五回目で初めて会津地域を取り上げた「会津郡・耶麻郡」編がまほろんで開催されました。

発掘によって明らかにされる遺跡の内容や出土品の調査成果は、地域の歴史を掘り起こすためにも重要な意味を持っています。そこで今回は「出土品の里帰り」として、地元会津の当館でまほろん移動展「新編陸奥国風土記」を開催することになりました。

会津には重要な遺跡が多く、一度に紹介することが難しいため、主に縄文時代から弥生時代までの資料を「その一」として展示いたします。さらに今回はまほろん保管の県教育委員会発掘資料のほか、当館の所蔵資料、地元市町村による調査資料の出品も予定した「拡大版」を検討しています。ご期待ください。



法正尻遺跡出土縄文土器
福島県教育委員会蔵
(考古担当 高橋 満)

まほろん移動展は、平成一九年三月十日（土）から五月三日（日）まで

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「くらしの器―鎌鉢から大皿まで」
会期 平成一八年一月二一日(火)
平成一九年一月二二日(日)
「祝いの布―布団・風呂敷・刺子絆纏」
会期 二月六日(火)～三月二五日(日)

講演・講座

※は要申込

◎民俗講座
「会津の職人巻物の民俗的世界」
講師 学芸員 佐々木長生
日時 一月二八日(日)午後一時半～三時
「会津の野鍛冶」
講師 学芸員 鈴木克彦
日時 二月四日(日)午後一時半～三時

◎歴史講座
※「身近な歴史を発見しよう1」
講師 歴史分野学芸員
日時 二月一〇日(土)午後一時半～三時半
※「身近な歴史を発見しよう2」
講師 歴史分野学芸員
日時 二月一七日(土)午後一時半～三時半
※「身近な歴史を発見しよう3」
講師 歴史分野学芸員
日時 三月三日(土)午後一時半～三時半
※「身近な歴史を発見しよう4」
講師 歴史分野学芸員
日時 三月二一日(日)午後一時半～三時半

◎体験講座

※「紙すき―はがきを作ろう」
講師 伝統技術保持者 安斎安夫さん
日時 二月二一日(日)午後一時半～三時
※「おもちゃをつくろう」
講師 展示解説員 幕田しのぶ他
日時 三月一〇日(土)午後一時半～三時半

実演

場所 体験学習室

「昔語り」

講師 語り部 山田登志美さん
日時 三月二五日(日)午後一時半～三時

木曜の広場

場所 講堂 入場無料

博物館再発見

◎第一〇回「大陸からふくしまへ」
講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 横須賀倫達
日時 一月一八日(木)午後一時半～三時
◎第一一回「縄文社会」
講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 高橋満
日時 二月一五日(木)午後一時半～三時
◎第一二回「縄文時代の信仰」
講師 館長 赤坂憲雄 学芸員 森幸彦
日時 三月一五日(木)午後一時半～三時

はくぶつかんで遊ぼう!

場所 体験学習室

「鬼の面をつくろう」
日時 二月三日(土)午前九時半
～午後四時半
*展示解説員がご案内いたします。
*時間内随時受付 所要時間二〇分程度

やさしい展示解説会

*展示解説員による常設展の案内です。
*毎週土曜日、日曜日の午前十一時と午後二時から三〇分ほど行います。
*なお、他の行事と重なる場合は開催いたしません。

*その他、行事等の詳細に関しては、月行事予定やホームページをご覧ください。

一～三月の休館日

年末年始 一二月二八日(木)～一月四日(木)
一月 九日(火)・一五日(月)・二二日(月)・
二九日(月)
二月 五日(月)・一三日(火)・一九日(月)・
二六日(月)
三月 五日(月)・一二日(月)・一九日(月)・
二六日(月)・二六日(月)

編集後記

平成一八年度も、あと三ヶ月となりました。冬期間の博物館では、味わい深い展示や行事を予定しています。

「奥会津の職人巻物」展は、職人たちに伝わる巻物から、その技術の伝承と信仰をご紹介します。テーマ展示「くらしの器」と「祝いの布」展では、身近なやきものや布に、くらしの美を発見することができます。

四回連続で行う歴史講座「身近な歴史を発見しよう」は、周囲にある歴史資料を参加者自身が調べる講座です。調査することの楽しさを感じていただけるのではないのでしょうか。館長と学芸員の対談を行っている今年度の「木曜の広場」。最後の三回は考古分野の学芸員が続けて登場。常設展の魅力と課題に迫ります。

好評を博している「はくぶつかんで遊ぼう!」。今回は「鬼の面づくり」です。博物館で作った鬼の面で、「豆まき」をなさってはいががでしようか。

本年度から始まった「四季のイベント」。音楽や芸能の公演などを行い、博物館が皆さんの文化的交流の場となることを目指しています。本年度は、馬頭琴コンサート、猿まわし公演、日本最古の笛と世界最古の民族楽器の演奏会、博物館クリスマスコンサートと朗読を行いました。

来年度は、第三土曜日に、さらに充実したラインナップでおおくりする予定です。その他、館長の土曜講座など、来年度は毎月第三土曜日に魅力的な行事を予定しています。四月から、第三土曜日は博物館へ!!

(小林)